世界の森林・コンゴ盆地についての基礎知識

（基調講演に先立って）

コンゴ民主共和国 環境・持続可能開発省
政策アドバイザー/ JICA専門家/林野庁派遣職員

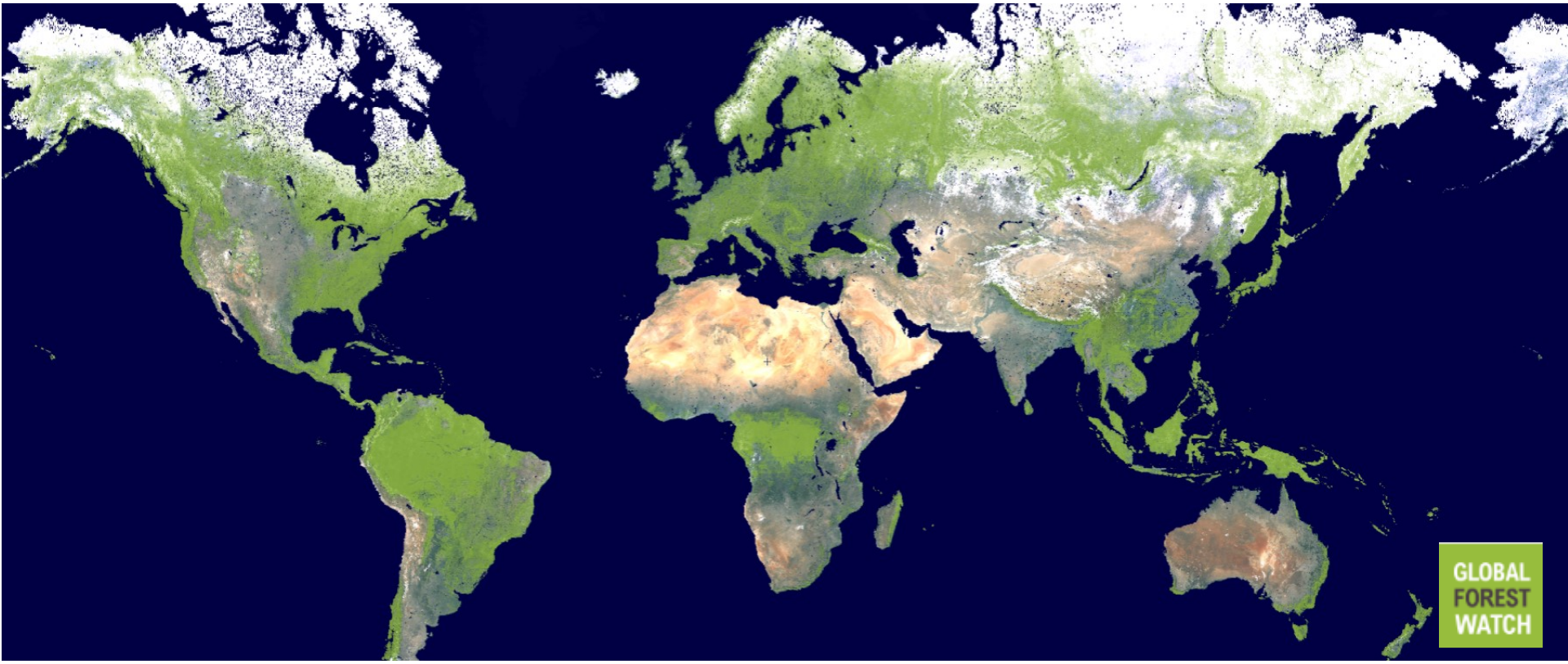
大仲　幸作

発表目的

エワンゴ教授の基調講演を聞いていただく前に、マクロレベルで、世界の森林やコンゴ盆地について、基礎的な理解を得ていただく。

地球上の森林の広がり

世界の陸地の約　割、約４千万km^{2}が森林（海域も入れると　割弱）

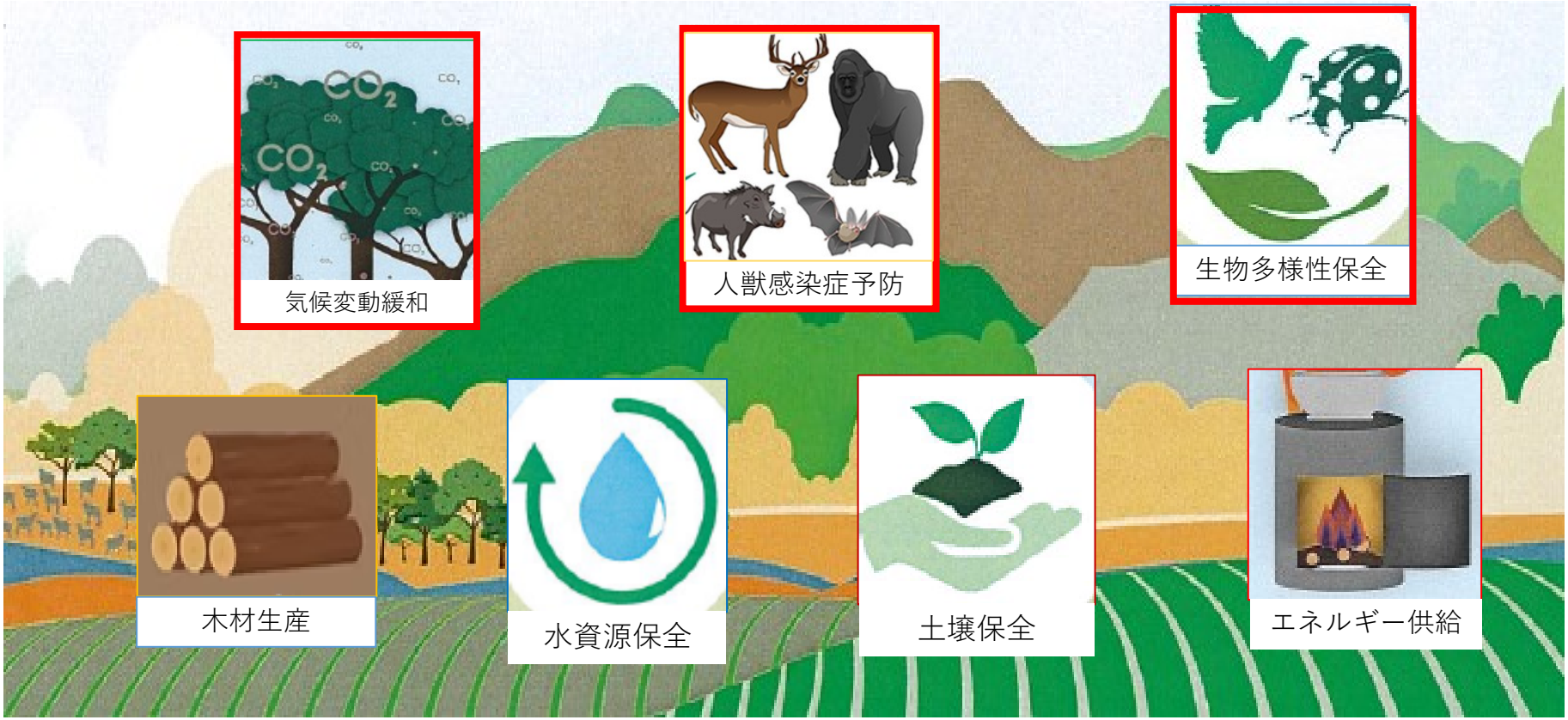


Source: Global Forest Watch(www.globalforestwatch.org)

森林がもつ公益的機能

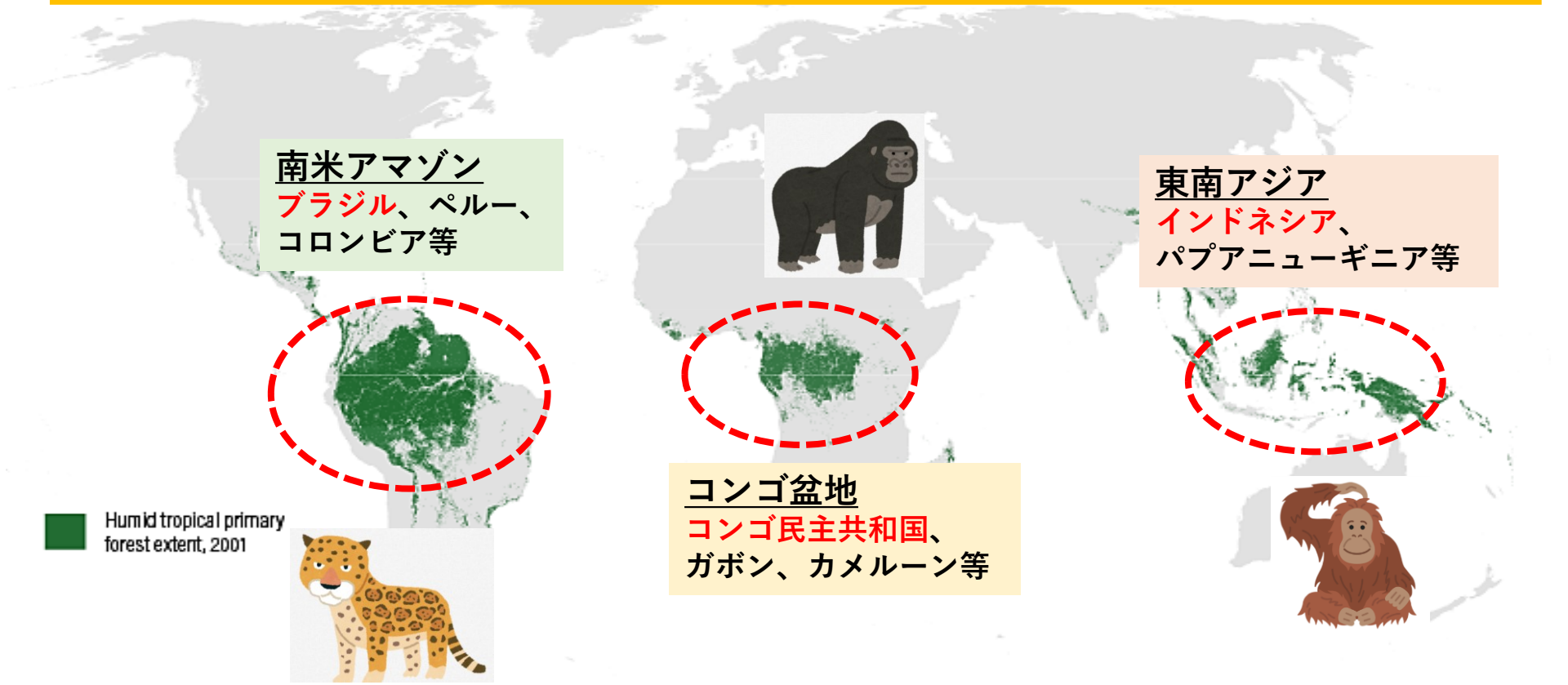
地球規模課題

- 多くの野生動植物が生息(生物多様性保全)：全陸上生物の８割
- 膨大な二酸化炭素を吸収・貯蔵(気候変動緩和)：年間約80億トン(正味)
- 人獣共通感染症の発生を予防：病原体をもつ野生動物との接触回避



熱帯林について

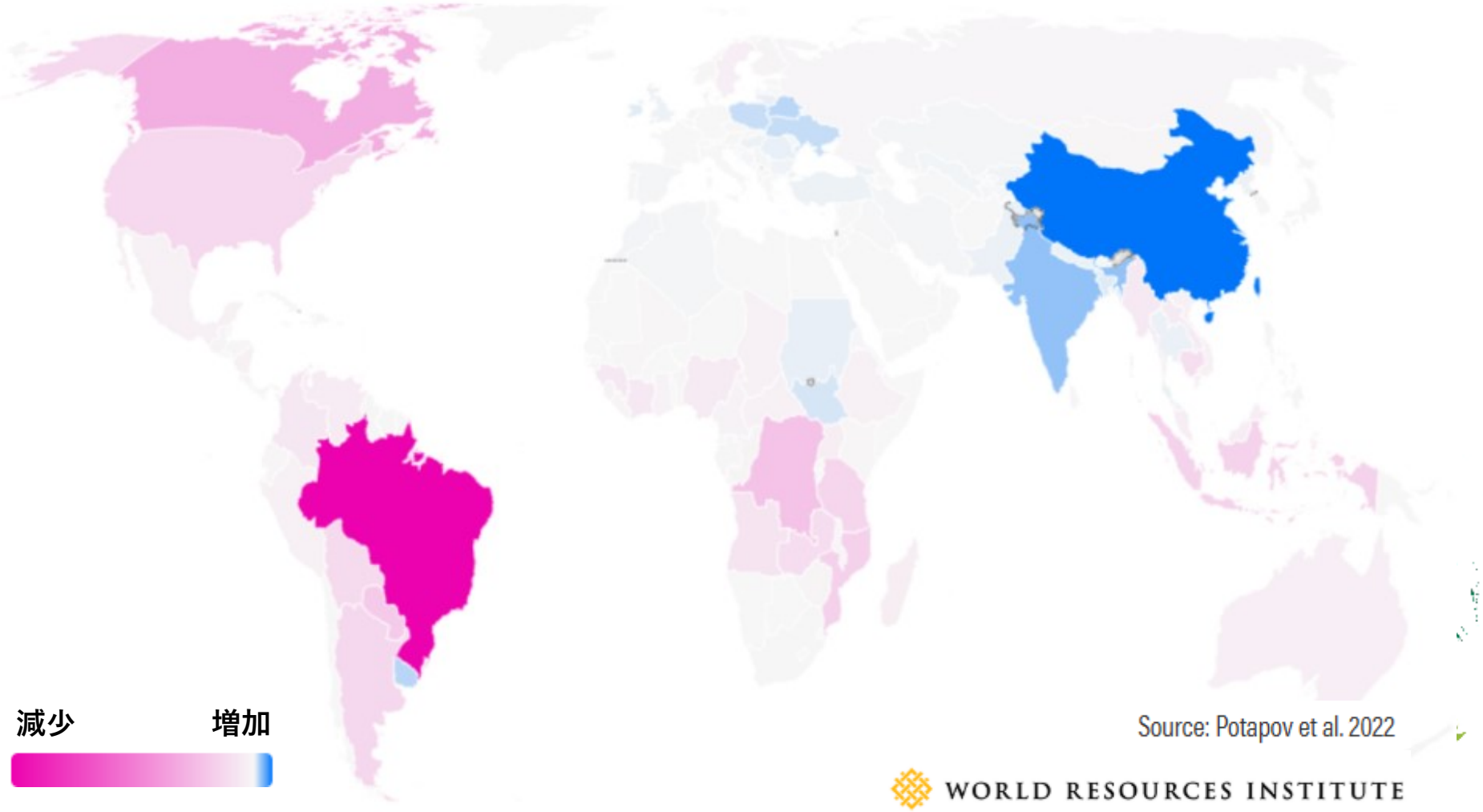
- 一年中温かい地域(主に途上国)に分布する森林
- 未開発の広大な「原生林」が残る地域(全陸地の１割弱)
- 地球規模課題への対処に必要不可欠⇒国際社会が協力して保全する必要



WORLD RESOURCES INSTITUTE

熱帯林の現状

世界の森林減少（土地の改変を伴う）の大半が　　で発生。



熱帯林減少の理由

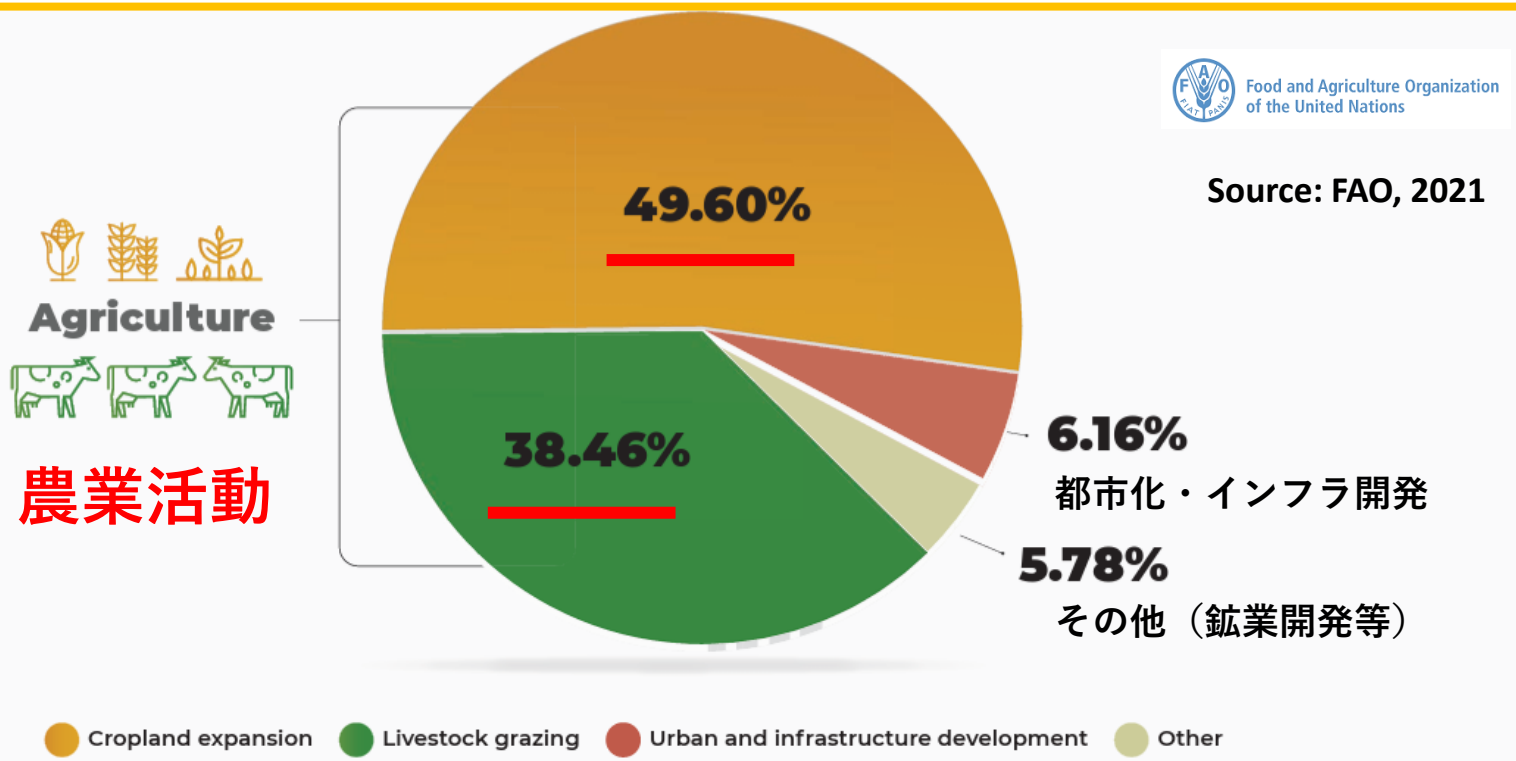
- 熱帯林減少の主原因
- 農業活動：

① 商品作物の栽培（牛肉、パームオイル、大豆、チョコレート、コーヒー等）

⇒ 国際経済(貿易)：生産者・消費者双方による環境保全対策の実施

② 主食用作物の栽培（トウモロコシ、イモ、コメ等）

⇒ 貧困(人口増加)：国際協力の推進



コンゴ盆地について

- アフリカ最大、世界第二の規模の熱帯林地帯：日本の約５倍の面積
- コンゴ盆地の対象国：コンゴ民主共和国(全体の６割)、コンゴ共和国、ガボン、カメルーン、中央アフリカ、赤道ギニア

Source: Global Forest Watch(www.globalforestwatch.org)

コンゴ盆地の重要性①

- 生物多様性の保全：ゴリラ、チンパンジーなどの大型霊長類、マルミミゾウ、オカピやコンゴクジャクなどユニークな森林性野生動物の貴重な生息地。

コンゴ民主共和国が作成した野生動物保護を訴えるためのポスター

ボノボ

マルミミゾウ

©Hagiwara Mikikoko

オカピ

森林バッファロー

©Hagiwara Mikikoko

コンゴ盆地の重要性②

● 気候変動の緩和

南米アマゾン	コンゴ盆地	東南アジア
CO2を年間(正味) １億トン程度吸収 ≒開発がどんどん進行 している状況	年間(正味) 6億トン吸収 ≒まだ比較的保全 されている状態	年間(正味) 5億トン排出 ≒既に開発が進行 してしまった状態

Notes: all values in units of billion metric tonns CO2e per year

20.01.21

GLOBAL FOREST WATCH

WORLD RESOURCES INSTITUTE

（発表者加工）

参考：日本の年間CO2排出量約10億トン

コンゴ盆地の重要性③

- 何万種の野生動物が生息するコンゴ盆地は、**エボラ出血熱やサル痘など野生動物由来の深刻な感染症のホットスポット**
- コンゴ盆地生態系の保全→人獣共通感染症(全感染症の約６割)の発生予防

THE SANKEI SHIMBUN

発症後48時間で死に至る　またもコンゴ民主共和国で原因不明の「X病」、死者50人以上

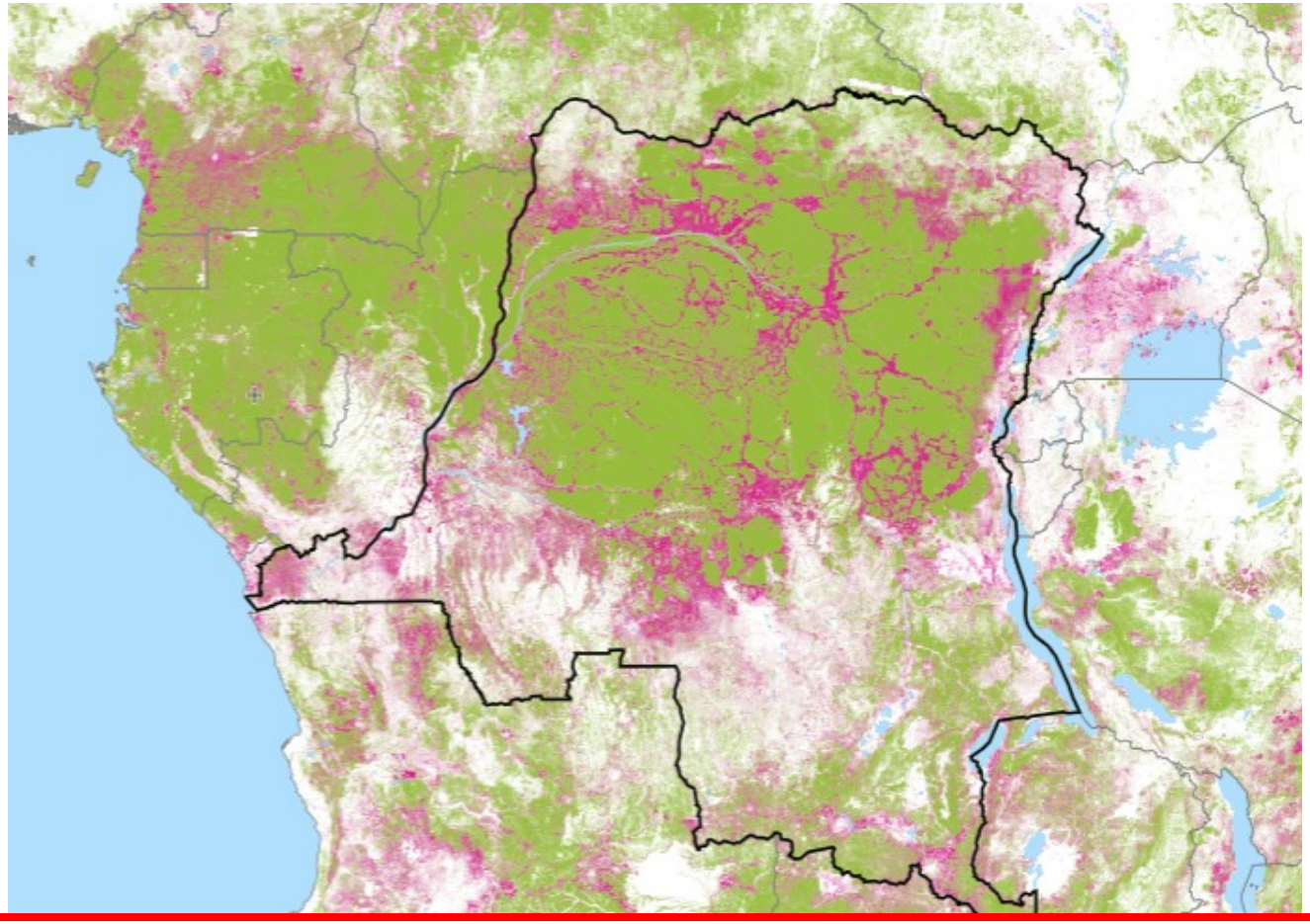
2025/2/25 19:06

ポスト　反応　記事を保存

国際 | 中東・アフリカ

日本の支援によって整備されたコンゴ民共和国の
国立生物医学研究所の研究・検査棟

コンゴ盆地の現状



Source: Global Forest Watch(www.globalforestwatch.org)

- コンゴ民主共和国だけで、年間4,000km^2（東京都の約２倍）の森林が消失
- このままのペースで進めば、2100年にはコンゴ盆地からオカピが住めるような原生的な熱帯林はなくなってしまう可能性。

発表のまとめ

- 全陸地の約３割を占める森林は、地球規模の課題にも関わる、様々な公益的機能を果たす不可欠な環境財。
- 中でも、三大熱帯林の一つであり、アフリカ最大の熱帯林地帯である**コンゴ盆地の保全は、気候変動の緩和、生物多様性の保全、人獣共通感染症の予防といった観点から極めて重要**。
- 現在、（土地の改変を伴う）森林減少の大部分は、途上国の熱帯林で発生しており、**その主な要因は、牛肉、パームオイル、大豆やチョコレート等の商品作物や主食作物の栽培を目的とした農業活動**。
- 近年、**コンゴ盆地においても農業活動に起因する森林減少が深刻化**しており、その水準が高止まり。

専門用語・地名

ICCN：

- Institut Congolais pour la Conservation de la Nature（コンゴ自然保護機構）
- コンゴ民主共和国において自然・野生生物保護を担う政府機関。
- 保護区の管理、野生動植物の保護（密猟対策を含む）等
- 武装したレンジャーを配置して違法活動の取り締まり。
- 資金・能力不足を補うために先進国や環境団体等から支援。

先住民族：

- コンゴ盆地には「ピグミー」と称される先住民族が森と密接に関わる狩猟採集民として生活。
- コンゴ民主共和国を含め、中部アフリカ全域には、農耕を基盤とした定住生活を営む『バンツー系民族』が広く分布し、人口の多数派を形成。

イトゥリ州エプル（Ituri Province, Epulu）：

- コンゴ民主共和国は全26州から成立。
- オカピ野生生物保護区はイトゥリ州に設定。
- エプルはICCNの管理本部やオカピ飼育センターなどが存在するイトゥリ州の一村であり、オカピの保全活動の拠点。